

子どもたち

炉端の授業

私ら学校に行くときはね、雪はいっぱい。腰きりくれえ降ったしね。誰も歩く人いねえんだおねえ。そうして、ほれえ、いよいよ弱る人が、ハバキ履いて、ワラジ履いて、カンジキこいな大きいなの履いて、歩くのだおねえ。ボツツン、ボツツンと跡（あと）つかっただとご、ほご、跡ついでから、「学校さ行げ」なんつわって。行っだって、行くのに膝（しじゃ）きり。カンジキの跡歩ったって、ドツブン、ドツブンとぬかってねえ。だから、いつまでもかかって、学校さ行っただって、時間は遅れるしねは。

ほして、たまぁに跡（あと）ついだとき行くとねえ、あの先生が、寝間着、着でねえ。そして、炉さ炭おごしてねえ、こご（炉縁）に居でんだったねえ。生徒あんまりいないからね、雪降って。だから、私ら学校さ行っただって、私、五年生・六年生ころ、大きい分でね、先生がご飯食った茶碗を洗ってけたり、釜っこ洗って米を研いでけたりね。して先生が、私らほれ、五、六人行ぐもんだからね、あの金（かね）の火箸で、「これは何それ、これは何それ」って、炉の灰に書いて。ほうして教えらったって、何、ほなこと覚えるも何もしねえの。たまにしか行かねからね。

雪降ったどって行かないしね。あと、夏場あ、雨うんと降っと、ほの丸太橋ね、こいな丸太、三本ぐれえこうして、ほいつ渡って歩いて行くもんだから、それが、雨降っと流されっちゃね。とすぐに架けらんねから。ほしてこんど、橋流されたどって行かないしね。そのうちこんど、家〔うち〕で忙しいと、兄弟が豊富（ふだ）なもんだから子守りだったのね。

（『升沢にくらす』 p.250）

手作りの木刀

むかし、野郎（やろ）っこども、なーにしで遊んだもんだったんだかなや。

なーんだか、別家になった野郎（やろ）っこどもなど、風呂敷（ふるしき）ねえと思（も）っど、あれ、「月光仮面」だとかなかかって、風呂敷（ふるしき）被（かぶ）って、馳しえたもんだな。うん、んだね。風呂敷（ふるしき）をね。頭から被（かぶ）っては、バフツと、マントみでぐしでは。

あとあれ、文夫なんか、あいづだもん、「刀こしゃえてけだ」とってな。あれ、木いであれだっちゃ、刀に作っで、うん、鉈（なだ）でね。こご（肩掛け）んとごさ、麻紐（あさひぼ）でこしゃえてけだもんだ。大っきな野郎だわな、ほんでも、結（い）わぐの麻縄だからや、細っこいから、肩挟れで分がんだわ。こごズーッどなっでさは。毎日（まいい）にち）背負っで、こご（肩）んとこ挟っては、こう、すっかり溝んなってるもんだったね。なんだか寝でても、離さねえよにしでやあ、いんだったなあ。

んだね。「月光仮面」が流行ったころね。チャンバラごっこつつうかなんつつうかね、ほゆなこどしでも遊（あす）んだんだったおなあ。

（『升沢にくらす』 p.256）

山学校川学校

ああ、山学校はしょっちゅう。夏なってくっとお、家出はってって、川さ行って、あの橋（升沢橋）こいでぐの嫌（や）んだくなっと、川さ降って魚っこ捕りしで。あど、いい加減なころ、帰（け）ってきて。…なに、ほだってえ、その当時は平気なんだもん。先生も、来ねえでも言わねえし。あどは秋になっどほら、クリっこだり、アケビだり、なんにも食いものねえから、アケビだりソゾミだり、あゆのまで食ったんだね。あれ甘酸っぱくてうめかったんだ。あとコクワの実だの、サクランボ、山桜のさ。ちっちゃいのと、大っきいのと、やっぱあったんだ、山にも。「ああ、こいつは大きいや」ってさあ。魚っこ捕りは、子どもだから、ばあっこ（少し）流れてっとこ止めて、で手でつかんで。カジカ・イワナ・ヤマベ、あどウナギも来たんだよな、夏なると。アユも上って来たんだよ、あの橋（升沢橋）あたり、ちょっと上まで来たんだよな。サクラマス来たよ、大っきいやつ。あれ、うめがったなあ。あれ、おかずに、一回に一切れ食（か）んねんだ、食うのいだしから、次の日さ残（のご）しでて。

（『升沢にくらす』 p224）

木登り・木渡り・水泳ぎ

子どもはみんな木登りしったんだ。木登りでも、なんでも。だいたい、食いもんねかったからね、ちったらこい時はね。木の実など食うためには、木登りしねけ駄目だったんだ。

なあに、おらほ、今では一メートルくらいだけって、むかしは二メートル。なんだって、学校半分埋まってっからね。だいたい、家（うち）入るんだって、階段作って家（うち）ん中入（へ）ったんだから。だれえ、家（うち）の屋根、渡って歩くんだおん。そのくれえ積もるんだもん。

冬は学校さ、焚物取りながら。雪の上さ出た枯木さ、焚物取り。雪の上の方、枝渡って、遊（あす）びながら。落ちてても雪だから、全然関係ない。だあれ、むかしは車も何もねえから。おれちゃっこいときは、車も何もねえ時代なんだ。

夏は堰堤（えんてい）で泳ぎ方。しょうゆ滝の下、石の堰堤ある、あそこで。あそこしかねかったもん、泳ぐとこ。あそごはたまり場だったから、升沢の子どもたちの。

おれ、ちっちゃいときまで、山、木うんとあったからあ、大水なんて出ねんだ。山の木）切ったから、大水ばんばん出るようになったんだ。変わったんだから、川。

（『升沢にくらす』 p.254）

運動会の出店

その当時、五十人いだんだからな、升沢分校で。

むかしあれ、出店は出たべし、運動会っちゅうと。どっから来たのか分かんねえけども、出店来たんだ。ちゃんとね、屋台みたいの。今の体育館のとごさぐーっと、あのすべり台のとごさぐーっと、あすぐ五、六軒は並んだよ。

うん、飴っこだのしゃあ、風船だのしゃあ、あと鉄砲、ブリキのおもちゃか。そしてね、五円だの十円だのだから、親に「銭（じえに）けろ、銭（じえに）けろ」って。ほのあだり銭（じえに）ねえから

ね。だいたい、十円つつの使ったこどねえんだからや。だって、店屋つつの、雑貨屋さん三軒で、あど店屋つつのねえんだもん。

(『升沢にくらす』 p.251)

学校の先生を増やそう

升沢分校、学校の先生（しえんしええ）も、そのころ一人しかいねかったからね。父ちゃん（夫）はみんなに働きかけて、先生（しえんしええ）一人雇うように、個人個人で自費出したもんだ。うん、自分たちで。ある人が三十円出せば、子どもが学校さ行ってる人五十円出すとかって、ほして、先生一人雇って。先生、一人で足んねえちゃ、学校生徒（がっこうしえいと）、三十人だの居んだもん。

ほら、宗右衛門さんとおら家（い）の父ちゃんと、一生懸命（いっしょけんめ）県だの歩ったんだから。升沢分校に高橋甚吾先生って人、居たったから。その先生の娘頼んで、一緒にやったのだな。そうしないと自分の子ども、外の学校にやんねけねえから。さっぱり、方っぱじ、自分の子どもに逃げられっちゃ。「ほんな升沢分校のような小（ちっ）ちえとこで、一番になってるより、吉田の学校さ行ってビリの方良（い）い」つつわれっぱ、出さねけねすべ、人の家さ頼んで。

それからみんな、教育熱心になったんでねえすか。うん、ほうだべよ。(『升沢にくらす』 p.251)

外の世界が見てみたい

親父死んだ後、まず、学校さやるとこでねえのさわね。食べんの精いっぱいなんだからは。だから、吉田の高等科進学は駄目だって言わったの。

おれ、「なんして兄貴ばりやって、おれとごやんねえ」って。だれえ、家（うち）でそんなに苦勞して、やっと生活してるっなんつう事（こど）は、まだあ、六年生のもんだから、分がんねえわけさ。「兄貴ばり学校さやって、なんしてやんねえって、駄々っ子したんだ」なんて、後で、とみの母（がが）、うんと言われたもんだから、覚えったのでね。「お前（めえ）のために、うんと苦勞したんだ、学校さやんなければ、も少し楽に…」なんて言われた。

「外の世界が見てみたい」と思ったんだかねえ。やっぱり、吉岡さなんど行ぐとさ、「ああ、こんなにいいとごろ、どこお…」って。吉岡で何かあるのなんだつど、行きてくて行きてくて。行きてえたって、三時間も四時間もかがんだからさあ、歩いて行ぐと。行きてえたって、行がんねかったし。

学校さは、裕福な吉田のね、大っきな百姓家から歩ったの。風呂焚きしたり、庭掃きしたり、朝に起きたら雨戸を開けたり、ウマさ食（か）しえたりとが。まず小間使いみてくさしえられて、学校から帰（かい）ったらど、行ぐまでね。そして、まず食べさせてもらって、あど教科書代だなんかは、家（うち）でみながら、学校さ歩かせてもらって。あど、学校終わってから一年、働いて。こっち山からね、おら達ばりでねぐ、そゆぐ子どもたち多くあったのさ。そちこち。

うん、学校さ歩ってるうち、お袋にはずいぶん怒らったんだよ。「なんぼ貧乏しで笑あれたっていいがら、人の物かっぱらったり、悪いことだけは絶対すんなよ」って、まず、口うるせえくれえ、家さ帰って来たたんび、言われたもんだね。お父さんいねえがら、きづく、騒がったんだべけっども。

(『升沢にくらす』 p.271)